文学少女の「寂しさ」
――雑誌『若草』における清水澄子

松藤梨紗

はじめに

雑誌『若草』の創刊号には、「姉」と題された散文が掲載されている。「姉は死んだ。それがたゞの死に方ではない。世間にも稀な死に方だ」[1]と始まるこの作品には、自殺した「姉」に対する、著者・清水龍郎のやるせない思いが綴られている。ここでの「姉」は、本名を「清水澄子」といい、実在の人物である。長野県に暮らす高等女学校生だったが、一九二五年一月七日に、突如、線路に飛び込み自殺する。[2]遺書[3]には、「文章家にならうとの心から、下だらない雑誌に読み耽つた」ために、「劣等な人間」になってしまったことに苦しみ、自殺を決意した旨が記されていた。この「雑誌」と澄子の自殺の関係性については、澄子の父で教員だった清水袈裟雄が、愛読していた雑誌を控えて臨んだにもかかわらず、苦手な幾何の試験の成績が振るわず、教師に叱責されたことが、「常時厭世思想の持主」だった彼女の自殺衝動を刺激したのではないか[4]と推測している。

「文章家にならうとの心」と遺書にある通り、生前の澄子は詩歌や小説、随筆を執筆していた。「あまりにも淋しきことよあまりにも悲しきことよ生きて居ればこそ」[5]のように、「寂しい」という語を多用して、自身の孤独や劣等感、希死念慮を表現する彼女の遺稿は、父の手で文集『清水澄子』としてまとめられた。その翌年二月には、『清水澄子』を再編集した『さゝやき』が、『若草』の版元である宝文館から刊行される。そうした関係から、『若草』及び、『若草』の姉妹誌である『令女界』には、一九二五年一〇月以降連続して、澄子の遺作や親族の随筆が掲載された。

澄子の作品が掲載された『若草』は、女学生向けの文芸誌『令女界』の投稿欄拡張の要望に応えて、創刊された雑誌である。読者層や寄稿者の流動の結果、プロレタリア文学やモダニズムをはじめとした、「あらゆる文学思潮が同居する」[6]、特異な雑誌になっていくのだが、創刊当初の『若草』では、「女性文壇の活舞台の一となると同時に、新しき作家の揺籃」[7]となることが目指されていた。徳永夏子[8]が考察した通り、初期の『若草』の誌面には、「厭やに情に負け易くて、而もそれを多少享楽するやうな処があつて、始終かう涙ぐましい」「センチメンタル」な[9]従来の少女小説からの脱却を奨励する、寄稿者から読者に向けた、様々な「教育」を確認することができる。

これら先行論を踏まえて、本稿では、『若草』において、自殺した文学少女・清水澄子がどのようにまなざされたのか、また、澄子の存在が誌面にどのような影響を与えたのかを考察する。それによって、寄稿者たちが読者に施した「教育」の実態、加えて、その「教育」に応えながらも、しかしそこに収斂されていくことのない読者たちのメンタリティを明らかにしたい。

一　文学は自殺の原因か　――寄稿者の反応

一九二五年から一九二六年にかけての『若草』の寄稿者は、自殺、特に自殺と文学の関係性を度々論じている[10]。本章では、澄子への直接的な言及に加えて、そうした自殺の言説を確認することで、寄稿者らの澄子像を検討していく。

最初に澄子に言及した寄稿者は、横山美智子[11]だった。横山は、前月の『令女界』（一九二五年一〇月）に掲載された、澄子の母・清水千代の随筆「永劫に」の寸評を発表する。「永劫に」を読んだ横山は、「清水澄子といふ少女の死の背後に、すぐ「文学との関係」を思つた」と語る。学業成績の乏しさだけで、「頭のいいさつぱりした気性」の澄子は自殺を選ばないはずだ。「すぐれた頭脳」を持つ澄子は、文学を通じて、「彼女の担い切れないほどのものを取り入れてしまったのはな

からうか」。そして、「自ら背負つた荷の重さに、彼女は堪へられな」くなって自殺したのだと横山は分析する。寸評末尾では読者に向けて、「文藝を貴女の、生くる喜びの因として下さい。（中略）しかし、分量をあやまつて下さるな」と注意喚起を行っている。

横山の述べる「文学に傾倒した末に自殺した少女」というイメージは、『若草』における澄子像の典型の一つである。編集長であった北村秀雄も「自殺を取扱つた作品」[12]で、横山と同様、文学少女の自殺と文学の関係性を論じている。北村は、文学少女を自殺に向かわせる「厭世主義」は、「自殺を取扱つた」「不健康な作品」[13]の提示する「安価な自殺賛美」を鵜呑みにした結果、生じたものだとする。文学作品の「読み方を知らない」若い読者たちがそうした作品に惑わされないよう、彼女たちの「批判力」を「養成」することを「使命」と語るとともに、「読者に受ければいゝぢやないか」という態度で「不健康な作品」を発表し続ける作家たちを北村は非難した。

北村の主張は、最終的に「文学少女の批判力育成」という、創刊当初の『若草』の目標へと重ねられていく。一方で、北村と類似した主張を行った横山については、「古い少女小説」[14]を書く作家だと『若草』上では批判されている。この批判に象徴されるように、澄子ら文学少女の自殺と文学の単純な接続は、『若草』においては、「苦笑を禁じ得な」[15]い言説として認識されていた。雑誌の目標と関連性を持たせた北村の言説はともかく、横山のような澄子のイメージは主流なものにはならなかった。

もう一つの澄子の典型的なイメージとしては、「周囲に理解者がいなかったために自殺した少女」というものが挙げられる。神戸雄一[16]は、『さゝやき』の書評で、「全く天才とでも云いますか、僅か十七歳にして（中略）余りに人生の虚偽と寂漠とを知り過ぎてゐた」と澄子の早熟さと才能に驚きを見せている。この反応は横山のものと近しいが、神戸は澄子の自殺と文学の関係性については言及せず、代わりに、「彼女の周囲にもつと理解のある人が欲しかつたといふことであります」と嘆いた。「因襲と矛盾と虚偽」に満ちた社会のありように苛まれる澄子の孤独や才能を理解し、尊重できた人物がいれば、

彼女は自殺を踏みとどまったはずだと神戸は考える。

神戸の語る「周囲の理解が得られずに自殺する天才」のイメージは、『若草』では、小島政二郎が既に提示していたものだった。小島は、「知られざる傑作」[17]という記事のなかで、ルノワールやスタンダール、バルザックなど、生前に才能が認められなかった、ないしは、才能を認められるのが遅れた芸術家を紹介し、「天才が時流に容れられないで、苦闘と寂寥のうちに一生の幕を閉ぢた実例」は、「我等が接する詩壇文壇にも数限りなくある」と述べる。「時を同じうして生きてゐる天才」に「正しい評価と尊敬とを」払えているか、彼らの「「傑作」を「知らず」に通過させてゐる」ような「無理解の暴虐を現に行ひつつあるやうなことはあるまいか」、今一度振り返りたいと小島は語った。小島の言説を参照すると、「周囲の理解が得られずに死んでしまった天才」というイメージの型が、『若草』及び文壇内で共有されていたことが推察される。神戸はその枠組みで澄子の死を理解したのである。

神戸とほぼ同様の意見を持ちつつも、さらに複雑な過程を辿るのが、南部修太郎だ。南部は『さゝやき』の序文を担当したことに加えて、その書評も『若草』に発表しており、澄子の作品との関わりが最も深い寄稿者といえる。『さゝやき』の序文[18]では、澄子の才能を「驚異」と激賞したのち、「因襲を厭い、虚偽を憎んで、真実の道に生きようとし」たが、そうした生き方は不可能であると気づいてしまったこと、そして、「理解と云ふ一人の温かき友さへも得られなかった」ことが、「先づ何よりも心の死を願はしめた」のだと自殺の理由を分析する。才能と孤独を理解する人間が周囲にいなかったために、澄子は死に魅入られてしまったという南部の理解は、神戸の理解と極めて近しい。しかし、『若草』では、南部は序文のものと異なる見解を述べている。その変化の理由は、南部が序文執筆後に『若草』に発表した記事の内容にある。

小島の「知られざる傑作」の直後に掲載された「文藝の誘惑」[19]という記事で、南部は、今日の読者は「鑑賞力」を身に付けているため、「隠れたる天才」や「「知られざる傑作」などと云ふ詞」は「あり得ない」と語る。そのうえで、作品が認められないという「不幸に陥つた人」がいるならば、それは「自己批判」が足りない。「認めらるべき何物も持たないのに」、

「自惚」れて文学の世界に「身を投じ」たのが悪いと述べた。加えて、南部は、澄子以外の中学生の鉄道自殺にも言及している。[20] その自殺は「小説類を耽読」したための「厭世自殺」と報じられたが、南部は「苦笑を禁じ得なかった」と述べ、文学と自殺を安易に結びつける風潮を批判する。さらには、「厭世自殺などをする人達」は、「素質的に厭世自殺をするやうに出来上つてゐる変質者が弱者である」とまで断言している。南部はこうした意見を『若草』で既に発表していたために、「隠れたる天才」である澄子の「厭世自殺」を、『さゝやき』の序文と同じ論理では語れなかったのである。

『若草』に発表された『さゝやき』の書評を確認すると、「澄子さんの持つてゐた貴い才能を理解し、洞察し得るやうな人が一人でも世間にあつたとしたら、或は澄子さんは救はれたのではないか」と初めは序文と同様の分析を行っている。しかし、それに続けて、澄子の死の「責任の大部分」は「現在の教育制度」が負うべきだ、と教育制度の欠陥を主張し始める。そして、自身の才能に無自覚であったトルストイに澄子を重ねながら、「今の教育にはあまりに個性を生かすと云ふ事」が「顧みられなさ過ぎる」と「世の教育の道に携はる人達」に「反省」を促した。このように、自身の発言の整合性を取るために、南部は「教育制度に殺された文学少女」という澄子像を新たに打ち出したのだ。

澄子の死をめぐる議論が『若草』で展開されていたのと同時期、文壇では、子どもの個性の尊重を重視する「大正自由教育」[21]への注目が高まっていた。書評での南部の見解は、そうした流行と関連性を持たせたものと推察される。[22] 澄子もまた、実父を含む教師を「お金の奴隷」と捉えて不信感を露わにする「教師」、[23] 澄子の机を勝手に漁った教師への怒りと嫌悪感を語る「午後」[24]といった作品を遺している。『若草』にも掲載されたこの二作からは、澄子も当時の学校のありように強い不満を覚えていたことが窺える。[25] 一方で、『清水澄子』に収録された「九月三日」[26]付の日記には、「学校の人達は、私の心を受け容れてくれない」と嘆いて反抗する「不良分子」の同級生の態度を「下らない」と批判し、「大勢の人間と共に社会といふ組織で生きて行くからには、自分といふものばかり考へてゐては駄目」だと学校側の考えに同調する様子も表れている。この「九月三日」は『さゝやき』では削除されており、澄子の「優等生」然とした態度は看取できなくなっている。ここ

から、宝文館側も「教育制度に殺された天才文学少女」として、彼女を売り出したかったと推測できる。『若草』が新人作家の育成に力を入れていた点に鑑みても、文学が死を招くイメージの定着は避けたい事態だったことは想像に難くない。

以上確認してきたように、『若草』の寄稿者は、「文学に傾倒した末に自殺した少女」、「周囲に理解者がいなかったために自殺した少女」ないしは「教育制度に殺された少女」として、澄子を取り扱った。そのイメージは、寄稿者の意見が単純に反映されたものではなく、『若草』に寄稿された記事や編集方針、当時の流行との相互関係のなかで形成されたものだった。では、読者はそうしたイメージをどのように受容したのか。次章では、読者の反応を確認する。

二．「少女の気分」の代弁者　――読者の反応

一章で見てきた記事のうち、明確な読者反応が確認されたのは、南部による『さゝやき』の書評に対するものだけだった。「南部修太郎氏の『感想折々』及び間宮茂輔氏の『貴女達に求める』いづれも為になる好文章でした」[27]、「南部修太郎氏の『感想折々』を面白く読みました」[28]というように、具体的な意見の記述はないものの、おおむね好意的に読まれたようだ。ただし、「殊に『ささやき』に寄せられた感想や、トルストイに就いての逸話は大変ためになることだと思いました」[29]と、澄子に重ねられたトルストイへの関心が殊更に述べられた点は見逃せない。この感想を見るに、南部が強く主張した教育制度と澄子の自殺の結びつきは、読者の印象には深く残っていないように思われる。

読者たちは、寄稿者のものとは異なる独自の澄子像を作り出していた。読者投稿欄・「座談室」の前身に当たる「薔薇の窓」には、掲載された澄子の作品を読んだ高須賀光子[30]からの、「読んで、私達の生活にしつかりとあてはまつてゐる」と思った。「ほんたうに私達に感銘されるものは、私達少女の気分になり得ての創作です」。「澄子姉よ、あなたの死は、私に新らたに、涙を流さゝずにはおかないです」という熱のこもった感想が確認される。彼女は、自分と同い年である澄子が「よく藝術

を理解しておられた」ことにも「敬虔」な思いを抱いたと語っている。しかし、それ以上に、澄子が「私達」の思いを代弁していることに「感銘」を受けたのだと強調する点は注目に値する。さらに、三笠露子は澄子の死を「いたましい」としつつも、同時に「若く亡びたゆゑに、より美しい寂しい囁きを私達に残したのではないかしら?」[31]と肯定する素振りも見せている。このように、読者たちは、澄子を「私達」の「気分」の代弁者と位置づけ、憧れのまなざしを向けているのである。

澄子が代弁者とされたことからも分かる通り、読者たちは、死への恐怖と関心を度々語っている。例えば、篠原静子の「死はすべてを解決してくれるでせう。（中略）けれど私はまだ天国をあこがれながら死に逢ふのが恐い」[32]という投書はその典型である。『さゝやき』刊行直後に投稿された作品[33]を見ていくと、「短歌」欄には「我が死なん時に泪を流すひと幾たりあらむ広き世界に」[34]と自身の死後に対する不安を吐露した短歌や、「散る故に花は美し死ぬ故に人のこの世をめでたく思ふ」[35]と死を賛美するような短歌が採用されている。さらに、神戸や南部による『さゝやき』の書評が掲載された翌月には、「前世」、「後の世」の有無をめぐる主張を展開する中村孝草[36]、「自殺したいとは思はないけど、自殺しても罪悪にならないと考へられゝば、そのはうが生きてゐる上で気持が明るい」[37]と語る白鳩妙子といった投稿者が登場する。『さゝやき』の刊行と連動するように、読者たちの、死や自殺に対する注目の度合いはますます高まっていったのだ。

澄子の作品が読者に与えた影響は、こうした議論の盛り上がりに留まらない。「小品文」欄には、選者の北川千代に「一寸清水澄子さんの（小道[ママ]）を思はせるやうなおほらかな筆である」と評された「この田舎道」（英鈴）[38]という作品が確認される。「この田舎道」は、道で迷った際に助けてもらった体験を振り返る小品だ。末尾には、道案内してくれた中学生が、別れたあともしばらく見送ってくれていたことに気づくと、「何となくなつかしく」なって「さよ――なら」と呼びかけた場面が表れる。北川が比較した、澄子の「小みち」[39]にも、下校途中に別れた「憲ちゃん」の姿が遠のいていくのを見ると、「何だかなつかしくなつて」、名前を呼ぼうとする件がある。

こうした構図の類似性は、「蚊」と「或る晩」（福澄薫）の間にも発見できる。『若草』にも掲載された、澄子の「蚊」[40]は、手慰みに潰していた蚊の瀕死のあがきを見て、自身の残酷さに気づいた経験を記す小品である。それに対して、「感想文」欄の入選作品の「或る晩」[41]は、鼠の死体を弄ぶ子どもに「不愉快」さを強く覚えるも、自身も同じように蛙を殺して遊んだ過去を思い出し反省する内容だった。「蚊」と共通した、生き物の死を通じて自身の残酷さを知る構図に加えて、末尾で「私がもつと勉強して人格が高等になつて、年も取ると余程考へも変はつて居るでせうか」というように、「勉強」と人格の「高等」さを結びつけている点にも、澄子の作品や考え方との類似性が見出せる。

「或る晩」は、同時期の『若草』に目立って確認された「反省文」的な作品の一つでもある。先に触れた徳永夏子[42]は、この時期の投稿文について、「過去の不道徳な行いや気持ちを反省する自分の姿を書くという特徴が見られる」と指摘する。徳永は、同人制解体以降に登場した男性寄稿者らが「他人の気持ちに寄り添う女性」という女性規範を称賛した点に注目し、「他人の気持ちに寄り添」い「自分の考えを捉え直」した、と寄稿者に表明するために、「或る晩」のような「反省文」の投稿が増加したと分析する。「他人の言うことを「鵜呑みに」する従順な少女イメージ」の浸透によって、女性読者の主体性が失われていったとする徳永の論考は一定の説得力を持っているが、この「反省文」の増加については、澄子の作品もその要因の一つとなっていた可能性がある。実際、澄子は「ああどうして私はこのわるい心をなおせないだろう。この心の五分の一でもよいからなおしてみたい」と嘆く「自分のこころをせめる」[43]のような「反省文」的な作品を多く記している。

ただ、澄子の作品に憧れた読者らがそれを模倣した、という直接的な因果関係だけで、「反省文」的な作品の増加を説明するのも性急だろう。「反省文」の増加を考察するにあたっては、さらに、当時の『若草』でリアリズムが奨励されていたことを確認する必要がある。南部は「感想」欄の選考後に、「諸君の心のままに、頭のままに、感じた事、考へた事、思つた事、見た事を要点を掴んで正直に書いて欲しい」[44]と読者に要請した。南部以外の選者では、田邊耕一郎も、「海底」に思わず「ひきこま」れそうになった際の「不安」や「憂愁」を表現した「夜の海」[45]という詩に対して、「夜の海の感じが精緻

巧みに現はれてゐるが、自分の感情はそれほど出てゐないのが不満です」と自身の心情をよりいっそう表すよう求めている。このように、自身の感情を作品に反映することが、この時期の『若草』のモードになっていたのである。

先述の通り、『さゝやき』刊行以降、『若草』の読者間では、自殺に対する関心が高まっていた。そうした「気分」の読者たちに、自分の感情を「心のままに」「正直に書いて欲しい」と要請すると、何が起こるか。その一例が、「感想」欄入選作の「生に慟哭する人」（風あけみ）[46]である。この作品では、「明日の事を考へまい」とする心に「体中」を「埋め」られた自身のありようを、「私はだん〳〵いけない子になつていく様だ」と批判し、このまま「憎まれて死んだ方が、どれだけ精神的に残つた人々を苦しめなくてすむか知つてゐる」と考え、自殺を図った少女の心情が赤裸々に語られる。当然虚構や誇張は含んでいるだろうが、素直な気持ちを語るよう求められると、周囲の人々を思って「反省」するだけでなく、激しい希死念慮まで吐露してしまう読者のありようは、寄稿者の提示した女性規範に従ったからという理由のみでは説明しきれないはずだ。

以上見てきたように、読者たちは澄子を「少女の気分」の代弁者というイメージで受容した。前後関係を改めて整理すれば、激しい希死念慮を吐露するような過剰さを孕んだモードが、澄子の登場に先立って、読者間で醸成されていた。そのような状況下で現れた澄子の作品と、読者のモードとが共鳴した結果、澄子が「少女の気分」の代弁者としてまなざされるようになったのである。そして、同時期に奨励されたリアリズムとの相乗効果によって、誌面には、希死念慮までをも赤裸々に語る「反省文」的な作品が表れてきた。

三、文学少女の「寂しさ」

ここまでの議論を踏まえて気にかかるのは、風あけみ「生に慟哭する人」への選評[47]である。南部は、「無垢な魂」でいる

ことの憧れを「打ち砕」かれてしまうのは、「現代人の苦悶」であると理解を示すが、そのために「死を望」む「心」は「弱い」、とそうした態度を改めるよう、風に伝えている。この批判からも分かる通り、寄稿者は自身の感情を「正直に」記すことを奨励したが、反省も、ましてや希死念慮の表明も求めていない。そもそも、「厭やに情に負け易くて、而もそれを多少享楽するやうな」小説は、創刊時から脱却するべきものとして語られていた。「生に慟哭する人」のような作品は、そうした「センチメンタルな小説」ではないのか。さらに言えば、澄子の作品も「センチメンタル」なものではなかったのか。澄子の作品と読者の作品の間に差があるならば、それは何なのだろうか。

この問題を考えるうえで、まず参照したいのが、澄子の作品が初めて掲載された第一巻三号の「編集後記」[48]だ。田邊耕一郎は、「『小筥』は清水澄子氏の可憐な夢を秘めたるもの」と澄子の作品を紹介する。南部と池田小菊の作品に対する「精読を乞ふもの」、橋爪健の作品に対する「社会の小さな運命を描ける好短編」といった紹介と比較すると、ニュアンスの違いが分かる。紹介された当初は、澄子の作品も「少女」的で、「センチメンタル」なものとして扱われていたように思われる。

さらに、一章で触れたように、『さゝやき』及び『若草』に掲載された澄子の作品には、宝文館側の編集が加えられている。『さゝやき』では『清水澄子』収録の「九月三日」が削除された。『若草』掲載の「教師」の末尾には、あたかも作品の続きであるかのように、別のエッセイ[49]が接続されている。加えて、どちらの掲載作品も、句読点や改行の追加、文章の削除、台詞の改変など、『清水澄子』収録のものと比較すると、かなりの数の異同が確認される。こうした「添削」からは、「天才文学少女」という称賛と裏腹に、『若草』の編集部および宝文館にとっては、澄子も他の読者たちと同様に、「教育」すべき少女として捉えられていたことが見えてくる。出光明が「天才的な文学少女のように、一部の人でいわれているが、彼女も感傷的な一文学少女に過ぎないのではなかろうか」[50]と疑義を呈しているように、「寂しさ」を吐露した澄子と彼女の作品が特異なものだったか否かは、やはり容易に結論が出せない問題である。強いて言うならば、澄子が本当に死んでしまったために、作品に表れる希死念慮がリアリズムの域に達してしまったとは指摘できる。称賛された澄子と読者との間に差

がないのならば、寄稿者の批判する「センチメンタル」の恣意性も浮き彫りになってくるだろう。

冒頭で述べた通り、『さゝやき』刊行前後、『若草』には連続して澄子の関連作品が掲載された。第二巻二号以降は『さゝやき』の広告が大々的に組まれており、「寶文館も〈清水澄子〉の営業には相当力を入れていた」[51]と分かる。一方で、第二巻八号で『さゝやき』の広告の掲載が一度終了すると、澄子の話題は登場しなくなる。その消失とほとんど入れ替わるように、片岡鉄兵「モダン・ガアルの研究」の連載が開始し、「主張すべき事は主張し、欲求する所は口に出して表現する」[52]モダンガールという新たな女性像が立ち現れてくる。年末に刊行された第二巻一二号には、『若草』の動向や文壇状況を振り返る記事が多数掲載されていたが、いずれの記事にも澄子の名前は確認されなかった。

『さゝやき』の重版がかかった第三巻一号以降、『若草』には再び広告が掲載されるようになる。「一大の文豪の著書も及ばぬ売行き！」[53]というキャッチコピーが付された、第三巻一〇号の広告では、同年七月に自殺した芥川龍之介と澄子の遺書の抜粋が並べられた。そして、この広告も一九二八年に入ると、枠が縮小し消えていく。こうした扱いも踏まえると、『若草』や宝文館が、その時々の流行と紐づけながら、澄子を「夭折の天才文学少女」という「キャラクター」として消費し尽くした印象は否めない。

しかし、この考察を以て、澄子が「作られた天才」であると結論づけたいのではない。自殺賛美的だと批判されながらも[54]、『さゝやき』が順調に版を重ねていったことは、作品の持つ強度の裏付けになるだろう。加えて、モダニズムやプロレタリア文学の台頭に際しても、『若草』の読者たちは、死んでみようとしても怖くて死ねず、このまま結婚すれば「淋しいが泣きながら生きて行かなければならな」くなるのだろうと逡巡する「死」[55]や、「人は死ぬ瞬間に、始めて自分の存在を感じるのだ」という人生観の表明と並行して友人関係の悩みを記していく「断片」[56]のような「センチメンタル」な作品を投稿し続けている。澄子が吐露した「寂しさ」は、寄稿者の言説や読者層が次第に移り変わっていくなかでも、『若草』に底流していくのである。

女性史研究家のもろさわようこ[57]は、澄子の厭世思考は、封建的な女学校教育に加えて、「進歩的な教養」を「身につけながら」も、それを資本主義的な「エリートの場に自分をおくため」に用いて、「おのれの世界に閉じこも」っていく父母の「プチ・ブル的エゴイズム」によって生じたと分析する。澄子の家族関係については、もろさわが批判するほど稀薄なものではなかったと志村有弘[58]が指摘しているものの、澄子の「寂しさ」が、女子教育の浸透や経済発展といった同時代の現象に接することによってもたらされていたのは明らかである。当然、そういった新たな価値観に直面し、葛藤していたのは澄子だけではない。彼女を称賛した『若草』の読者の多くもそうだったはずだ。

そもそも、『若草』創刊時に批判された「センチメンタル」な作品が、なぜ少女小説家らによって量産されたのかを考えると、それは「読者に受け」るから、つまり、読者たちがそうした作品を求めたから、という理由に行き着く。もちろん、センチメンタリズムと、「女性らしさ」というジェンダー規範との間に存在する強固な結びつきは無視できない。それでもなお、苦しい心中を吐露する澄子が「少女の気分」の代弁者として憧憬されたことを踏まえると、『若草』の読者たちにとっては、「寂しさ」を語り浸る文学も必要不可欠なものと認識されていたことが理解できる。そして、読者たちは、そうした文学を読むだけでなく、自分の手でも書き始める。

澄子は友人に送った手紙[59]のなかで、自身の煩悶を綴ったのち、「下らないことを書きました」と伝えている。「下らない」という言葉には友人への恐縮の念が表れているが、それに続けて、「こんがらがつて居る」自分の心を「良く表はしてある」と「信じて居る」と述べたのは示唆的である。たとえ、「下らな」くても、「大人」に批判されても、自分のために書いてしまう。そうした切実さをもって文学と向き合う少女たちの姿が、『若草』での澄子の受容からは浮かび上がってくるのだ。

付記

・旧字は原則新字体に改めた。

・清水澄子の作品は、第一に、清水澄子著・清水袈裟雄編『清水澄子』（信濃毎日新聞社、一九二五・四）から引用し、『若草』に掲載された作品については、優先して『若草』から引用した。

（注）

（1）清水龍郎「姉」（『若草』第一巻一号、一九二五・一〇）一八頁

（2）「略歴」（清水澄子著・清水袈裟雄編『清水澄子』信濃毎日新聞社、一九二五・四）

（3）清水澄子「遺書」（清水澄子著・清水袈裟雄編『清水澄子』信濃毎日新聞社、一九二五・四）一九二頁

（4）清水袈裟雄「澄子の思想を辿りて」（清水澄子著・清水袈裟雄編『清水澄子』信濃毎日新聞社、一九二五・四）附録七頁

（5）清水澄子「さゝやき　一」（清水澄子著・清水袈裟雄編『清水澄子』信濃毎日新聞社、一九二五・四）七九頁

（6）小平麻衣子「文芸雑誌『若草』について」（『文芸雑誌『若草』私たちは文芸を愛好している』翰林書房、二〇一八・一）六－二四頁

（7）田邊耕一郎「編集後記」（『若草』第二巻六号、一九二六・六）八一頁

（8）徳永夏子「啓蒙される少女たち――『若草』の発展と女性投稿者」（『文芸雑誌『若草』私たちは文芸を愛好している』翰林書房、二〇一八・一）一一六－一三四頁

（9）南部修太郎「感傷的なる文藝」（『若草』第一巻一号、一九二五・一〇）一二－一三頁

（10）貞包英之によれば、一九二〇年代は、「神経衰弱」及び「厭世自殺」の急激な増加と、それに伴う報道の過熱によって、「モード的なブーム」が形成された時期に当たり、そのなかで、厭世自殺を青年学生特有の現象とする見方が「ジャーナリスティックに構築され」いったという（貞包英之「スキャンダルとしての自殺：20世紀前半の「厭世自殺」の歴史社会的分析」『山形大学紀要（社会科学）』第四五巻第二号、二〇一五・二、一－二八頁）。そのような状況下で、一九二三年六月の有島武郎の

自殺もスキャンダラスに報道され、「文学になど凝ると自殺しかねないという印象を一般の人々に持たせ」（奥野健男「文學者の自殺」『日本近代文学大事典　第四巻』一九七七・一一、四六一－四六三頁）ることになった。澄子の登場や、以降で取り上げる議論は、こうしたブームと密接な関わりがあることが推察されるが、一九二〇年代における文学と自殺をめぐる言説の精査は、紙幅の都合上、別稿に譲りたい。

（11）横山美智子「文藝の魅力」（『若草』第一巻二号、一九二五・一一）七七－七八頁

（12）北村秀雄「自殺を取扱つた作品」（『若草』第二巻一号、一九二六・一）六九－七〇頁。なお、この評論は、澄子への直接的な言及はないが、北村が「姉」が掲載された巻号で編集長を務めていること、さらに、作品後半にかけて、「文学少女の自殺」に批判の焦点が絞られていくことを踏まえ、澄子の死を念頭に置いて執筆されたものと推測した。

（13）ここで批判される「不健康な作品」の具体的な作品名や、そうした作品を発表する作家の名前は明かされていない。一九二五年から一九二六年にかけて『若草』で発表されたうち、自殺を扱った小説としては、橋爪健「彼方の世界に投げかける花」（『若草』第二巻一号、一九二六・一）、藤ふみ子「残されたもの」（『若草』第二巻三号、一九二六・三）、高群逸枝「野の話」（『若草』第二巻九号、一九二六・九）の三点が挙げられる。いずれの作品の語り手も自殺者（未遂含む）を観察する人物として造形されている。プロレタリア文学の影響が窺える「彼方の世界に投げかける花」の以外の二篇には、自身も希死念慮に苛まれながらも自殺した姉の冥福を祈って生き続ける妹（「残されたもの」）、自殺した少女を「賢明」と評価し、死を「不幸や、苦痛をいやす唯一のもの」とする「私」（「野の話」）といった、自殺に惹きつけられる語り手が登場する。これら三作品はすべて、北村の批判の掲載以降に発表されており、読者の反応も確認されなかったが、こうした作品が掲載され、『若草』の読者の目にも触れていたということは指摘できる。また、読者反応が確認されなかった点に関しては、自殺賛美的な作品が目新しくない、陳腐なものになっていた可能性も視野に入る。

（14）井上康文「少女画報寸評」（『若草』第一巻三号、一九二五・一二）六八頁

（15）南部修太郎「日記帳から」（『若草』第二巻二号、一九二六・二）二九－三〇頁

（16）神戸雄一「「さゝやき」を読む」（『若草』第二巻五号、一九二六・五）五七－五九頁

（17）小島政二郎「知られざる傑作」（『若草』第二巻一号、一九二六・一）二一六頁

(18) 南部修太郎「白百合に代へて」(清水澄子『さゝやき』宝文館、一九二六・二) 一-四頁
(19) 南部修太郎「文藝の誘惑」(『若草』第二巻一号、一九二六・一) 七-一一頁
(20) 注15に同じ。
(21) 浜田陽太郎「大正自由教育」(『国史大辞典』、吉川弘文館、ジャパンナレッジ) https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=30010zz292060 (二〇二三年八月一四日閲覧)
(22) 注6に挙げた論考で小平麻衣子は、『若草』の読者層には「女学生か卒業者」が多く、「教員を職業にするもの」が目立つ、と読者投稿の内容から分析している。ここでの南部の見解は、読者のなかに一定数存在した教師に向けたアプローチだったとも考えられる。
(23) 清水澄子「教師」(「蚊　他三篇」『若草』第二巻二号、一九二六・二) 三九-四二頁
(24) 清水澄子「午後」(「蚊　他三篇」『若草』第二巻二号、一九二六・二) 四二頁
(25) もろさわようこ(「大正デモクラシーと女たち」『信濃の女　下』未來社、一九八九・一一)、宮脇昌三(「解説」『長野県文学全集〔第Ⅱ期/随筆・紀行・二日記編〕第九巻　日記編〈Ⅰ〉』郷土出版社、一九九八・一一)もともに、澄子の教師不信と自由教育の関係性を述べている。当時、長野県の初等教育は白樺派の影響を受けた自由教育思潮が盛んであったが、澄子が進学した上田高等女学校では依然、従来の婦徳教育が実施されていたために、大きなギャップを感じ、教師に対する強烈な反発心を形成するに至ったと推測されている。
(26) 「九月三日　友に送る。」(清水澄子著・清水袈裟雄編『清水澄子』信濃毎日新聞社、一九二五・四) 一一四-一一八頁
(27) 宮川三郎(『若草』第二巻七号、一九二六・七) 六二頁
(28) 真二(『若草』第二巻七号、一九二六・七) 六二頁
(29) 岡子(『若草』第二巻七号、一九二六・七) 六二頁
(30) 高須賀光子(『若草』第二巻二号、一九二六・二)
(31) 三笠露子「今年のスタートから」(『若草』第二巻四号、一九二六・四) 七六頁。なお、三笠は他の入選作でも「帰途——血潮に濡れたゆふぐれの電車軌道……あんな死にかたはしたくない」(三笠露子「青白き日」『若草』第二巻九号、一九二六・九、

八〇頁）と澄子の自殺を想起させる一文を記している。「青白き日」においては否定的な語り口になっているものの、三笠の持つ、澄子の死に対する関心の高さが窺える。

（32）篠原静子（『若草』第二巻二号、一九二六・二）

（33）『若草』のへ投書は、投稿からおおよそ二、三か月後に誌面に掲載される。先に引用した、第二巻四号掲載の「今年のスタートから」は「「さゝやき」が出版されるとのこと」とあるため、『さゝやき』出版直前に投稿されたものと推測される。加えて、神戸と南部の書評が第二巻五号に掲載されていることも考慮し、『さゝやき』刊行後の投稿は第二巻五号に掲載されたと捉え考察を進める。

（34）備藤貞子（『若草』第二巻五号、一九二六・五）七三頁

（35）まり子（『若草』第二巻五号、一九二六・五）七五頁

（36）中村孝草「信仰と私」（『若草』第二巻六号、一九二六・六）七三頁

（37）白鳩妙子「自殺に就いて」（『若草』第二巻六号、一九二六・六）七五－七六頁

（38）英鈴「この田舎道」（『若草』第二巻五号、一九二六・五）七六頁

（39）清水澄子「小みち」（「小筥」『若草』第一巻三号、一九二五・一二）二五頁

（40）清水澄子「蚊」（「蚊　他三篇」『若草』第二巻二号、一九二六・二）三九頁

（41）福澄薫「或る晩」（『若草』第二巻九号、一九二六・九）七四頁

（42）注8に同じ。

（43）清水澄子「自分の心をせめる」（清水澄子著・清水袈裟雄編『清水澄子』信濃毎日新聞社、一九二五・四）七－八頁

（44）南部修太郎「感想の選後に」（『若草』第二巻六号、一九二六・六）五六頁

（45）木下勇「夜の海」（『若草』第二巻一一号、一九二六・一一）六七頁

（46）風あけみ「生に慟哭する人」（『若草』第二巻一一号、一九二六・一一）八八－八九頁

（47）注45に同じ。

（48）田邊耕一郎「編集後記」（『若草』第一巻三号、一九二五・三）五四頁

(49) 清水澄子「〇」(清水澄子著・清水袈裟雄編『清水澄子』信濃毎日新聞社、一九二五・四、一三七－一三九頁)。「教師」と「〇」は、「蚊」「午後」「ぐみの木」とともに「蚊　他三篇」(『若草』第二巻二号、一九二六・二、三九－四三頁)として掲載された。表題作の「蚊」以外の三作には見出しがあるが、「〇」のみそうした見出しがない状態で「教師」の末尾に掲載されている。「蚊　他三篇」という題に鑑みても、編集部が「〇」を独立した作品ではなく、「教師」の一部として取り扱っていることが理解できる。なお、「〇」は「虚無」の題で『さゝやき』に収録されている。

(50) 出光明「十代の自殺について　〈清水澄子・中沢節子・原口統三の自殺をめぐって〉」(『若い広場』第八八号、一九五五・一一)四三頁

(51) 志村有弘「清水澄子の世界」(『金子みすゞと清水澄子の世界』勉誠出版、二〇〇二・一一)二三九頁

(52) 片岡鉄兵「モダン・ガアルの研究(4)」(『若草』第二巻一〇号、一九二六・一〇)七四頁

(53) 『若草』第三巻一〇号、一九二七・一〇、一五三頁

(54) 日下部桂(「文学少女物語」『松本平文学漫歩　続』信濃往来社、一九五七・九、二三一－二四四頁)が、『さゝやき』を読んだ少年少女の鉄道自殺が相次ぎ問題となったことを述べている。

(55) みつ枝「死」(『若草』第五巻四号、一九三〇・四)一四二頁

(56) 三島瑤子「断片」(『若草』第六巻八号、一九三一・八)一〇四－一〇五頁

(57) もろさわようこ「清水澄子」(『信濃の女　下』未來社、一九八九・一一)一五〇－一五五頁

(58) 志村有弘「清水澄子の文学」(清水澄子『ささやき』勉誠出版、二〇〇二・一一)二九一頁

(59) 清水澄子「風の吹く日」(清水澄子著・清水袈裟雄編『清水澄子』信濃毎日新聞社、一九二五・四)一五一－一五四頁

(文化創造研究科国文学専修博士前期課程一年)